

陳景元の音注

——『南華真經章句音義』と『莊子音義』との異同を中心に——

浦山 あゆみ

一 はじめに

『南華真經章句音義』（元豐七年（一〇八四）叙。以下『南華音義』と略す）十四卷は北宋の道士陳景元（一〇二五—一〇九四）が著した書で、『正統道藏』中に收められる。⁽¹⁾ 周知のとおり、『南華真經』とは『莊子』の別稱であり、この名稱はほぼ唐初ごろに用いられるようになったと考えられる。⁽²⁾ 『南華音義』の音注の大半が陸德明の『莊子音義』と重なるからであろうか、これまで本邦ではあまり重視されてこなかったようであるが、中國の學者たちは近年相次いで陳景元の音注に着目し、いくつかの論考を發表している。なかでも馮二〇〇五は『南華音義』中に收められた多量の音注を解析し、特に聲母のみを取り上げてその體系を明らかにしようと試みたもので、『南華音義』の音注に関する論考としては最も詳細なものであろう。しかし残念ながら陳景元が参照したと思われる先行の韻書等についてはほとんど考慮されておらず、その點に物足りなさを感じざるを得ない。

同じ陳景元の著である『上清大洞真經玉訣音義』（『上清音義』と略す）の反切に着目して解析を試みた論考も既に

發表されている。汪業全氏の『上清大洞真經玉訣音義』音注考⁽³⁾（以下、汪二〇〇四a）である。筆者も實はひそかに『上清音義』の反切を抽出し考察したことがあるので、その結果と対照しながら興味深く讀んだのであるが、汪氏の論考は緻密かつ精確なものといえる。本稿ではその詳細は割愛するが、この汪二〇〇四aによれば、『上清音義』反切には改良の痕跡がうかがわれるという。大變面白い研究である。ただし、これもまた残念なことに改良を示す反切が数少なく、やはり物足りなさを禁じ得ない。それは『上清音義』そのものに收められた反切数がさほど多くないうえに、さらにそこから汪氏は、陳景元が参照したと考えられる先行韻書等の反切を慎重に除外して検討されたので、ほんの僅かの例しか残らなかつたためであり、まことにやむを得ない結果なのである。

そこで、本稿では汪二〇〇四aの證左をさらに見つけるべく、『南華音義』の反切にまで対象を擴げ検討していきたいと考えるのだが、紙幅に限りがあるため、今回はまず『南華音義』と『莊子音義』の音注の異同、とくに反切の相違を指摘し、その調査結果を明らかにしたいと思う。具體的には天理本『莊子音義』の音注と比較し、異なるものを一覽表にまとめて提示する⁽⁴⁾。

二 テキスト

『南華音義』がいつ刊行され、どのような過程を経て『道藏』に收められるようになったのかは未だ明らかではない。彭耜（生卒年未詳。ほぼ十三世紀頃の人らしい）の『道德真經集注雜說』に「又所注南華經章句音義凡二十卷、今并入藏」とあるのは、⁽⁵⁾『元藏』のことであろうか。ここでは「二十卷」と記されているが、現存の『南華音義』は十四卷であり、彭耜の記載と合わない。仔細に『南華音義』を見てみると、卷八の頭に收められる「雜篇在宥十七」に續いていきなり「雜篇至樂二十二」へと飛んでおり、十八―二十一までの四編が缺けていることが看取され

る。『莊子音義』と比較してみれば、確かに「天地第十二」「天道第十三」「天運第十四」「秋水第十七」に相當する箇所が『南華音義』には無い。さらに『南華音義』の付録とも言うべき『南華真經章句餘事』に『南華音義』の篇名および章句の分類・名稱が確認されるが、それによれば、もともと「雜篇天地十七章」「雜篇天道九章」「雜篇天運八章」「雜篇秋水七章」の四編があつたようである。

以上より、『南華音義』はおそらく、當初は現存する形と異なる卷の分け方で全二十卷あつたものが、いつの頃にか脱落し、その後新たに分卷されて十四卷となつたものであらうと推測される。テキストにこのような失われた箇所があるので、本稿では『莊子音義』全てと比較できたわけではない。

さて一方、『莊子音義』を含む『經典釋文』の成立と出版についても未解明の部分がなお残されている。これに關しては黃華珍氏の學位論文に詳しいのでここで一々は繰り返さないけれども、國子監直講の孫奭が「欲望彫印冀備一家之學」といい、詔により校定刊刻を許された『莊子釋文』とは、『南華音義』敍文にいう「國子監景德四年（一〇〇七）印本」のことであらう。⁽⁷⁾このテキストは失われて久しいものであるので、或いは『南華音義』と現存の『莊子音義』の諸テキストとを綿密に調査すれば、景德本について様々なことが明らかになるのかもしれないが、ここでは立ち入らないこととする。

本稿において重要なことは、『南華音義』と對照する『莊子音義』のテキストについてであらう。一字一字の相違を問題にするのであれば、やはりそのテキストは慎重に選ばなければならない。本来ならば景德本と對照すべきであるが、叶わない以上、現存最古の北京圖書館所藏本（以下、北本）を用いるのが當然であらう。しかし、黃氏の御研究を拜讀し、その校勘記を觀察したところ、どうやら北本には誤りが多いようである。したがって本稿ではあえて天理大學所藏本（以下、天本）を底本とし、『南華音義』音注と異同が認められる箇所についてのみ北本を

参照することとした。

三 対照に際して

先にも少し觸れたが、『南華音義』と『莊子音義』の音注の合致率は非常に高い。しかし、必ずしも先行の書物の音義を右から左へそのまま引き寫したものとはいえず、被注字の選定・音注・義注等、『南華音義』と『莊子音義』では異なっている箇所は少なくない。つまり、陳景元が彼なりの考えに基づき、音義を施していることが容易に看取されるのである。そして本稿の目的は、音注——とくに陳景元が何らかの意圖を持って更改したと考えられる反切の調査にある。そこでまず第一段階として、以下のようなことに配慮しつつ、『南華音義』と天本との比較を行った。

・『南華音義』の音注が『莊子音義』の又音や陸氏以外（徐・李・向・郭など）の音注と全同の場合も採らない。

例）『南華音義』「塊 苦對切」 天本「塊 苦怪反、又苦對反、徐胡罪反」

・被注字が同じではないが音注が全同の場合には採らない。これは基づいたテキストの相違によると考えられ、音注の更改とは認めがたいからである。

例）『南華音義』「机 音紀」 天本「几 音紀」、

・音注に用いられる文字が異體字の場合は採らない。

例）『南華音義』「釣 雕・叫切」 天本「釣 彫・叫反、本亦作釣」

以上に留意しながら、『南華音義』と天本との異同を調査し、さらには天本と異なる音注については北本とも対照

した。ごく簡潔に言えば、『莊子音義』には無い音注が『南華音義』に示される場合これを採用する、という基本姿勢をもって調査したことになる。その結果を一覧表にまとめて附し、この稿を終えることとしたい。

【『南華音義』と『莊子音義』の異なる音注一覧表】

〔凡例〕

- ・『南』 Ⅱ 『南華音義』音注、『天』 Ⅱ 天本『莊子音義』音注、『北』 Ⅱ 北本『莊子音義』音注を表す。
- ・――は該当する音注が無いことを表す。
- ・字が缺けている或いはつづれて認識できない場合は「缺」とする。
- ・避諱関筆は本字に戻して表示する。
- ・天本と北本で異なる場合のみ備考欄にその旨を示す。兩本が全同の場合は示さない。
- ・音注が異なり、被注字も異なる場合は、異なる被注字は（ ）に括弧で示す。
- ・『莊子』本文にある被注字として掲げられたのではないが、『南華音義』の「音義」部分に記されて音注がほとんどこれ、『莊子音義』には見えない音注は「 」に括弧で示す。

卷數	【南】章題	被注字	【南】	【天】	備考
卷一	【順化逍遙】	鯢	公渾切	徐音昆、李侯溫反	
		膠	古肴切	徐李古孝反	
		斯	相支切	——	
		培	薄回切	音裴、徐扶杯反	
		蜩	田聊切	音條	
		決	喜缺乎穴二切	向徐喜缺反、李呼穴反	
		莽	莫浪莫朗二切	莫浪反、或莫郎反	
	【極變逍遙】	春	束容切	束容反	【北】束容切
		斥	昌石切	——	
		而	奴登切	——	
		數	簡文所渝切	簡文所喻反	
		藐	平免切	——	
	【无功逍遙】	射	音邈、又弭沼切	音邈、又妙紹	【北】音邈、又妙紹反
		狂	音液、李食亦切	徐音夜、又食亦反、李實夜反	
		磚	渠王切	求匡反	
		鑄	蒲博反	蒲博反	【北】蒲博反
		辟	朱庶切	之樹反	
	【无爲逍遙】	毗	毗亦切	毗赤反	
卷二	【齊我】	居	斤於切	——	
		槁	古老切	枯老反	【北】良救反
		寥	良救切	良救反	
		注	烏攜切	烏攜反	【北】烏攜反
	【齊智】	閑	何閑切	——	
		閑	古寬切	古閑反	

卷三	
「化導」	「得生理」 「齊化」 「齊同異」 「齊死生」
紐 謫 擎 語 街 軋	「齊物」 「齊道」 「齊是非」 漚 啓 筵 嚙 詎 媛 蛆 獮 殺 飄 旁 茈 閭 栩 踰
於黠切 焚絹切 魚據切 其驚切 陟革切 女九切	弋質切 詰以切 音廷 欺竈切 其據切 音袁 子餘切 匹羨切 何交切 毗霄切 薄葬蒲光二切 徒奔切 一作茈、莫報切 音暗 況甫切 音蟬
徐女酒反 直革反 徐其驚反 魚據反 一一 (札) 徐於八反、又側列反	音逸、郭許鵬反、又已質反 一一 (筵) 徐音庭、李音挺 郭欺竈反、徐音謙 其庶反、郭音鉅 音猿 (且) 子徐反 篇面反、徐敷面反、又敷畏反 徐戶交反、郭作散、悉旦反 一一 薄葬反、徐扶葬反 徐徒奔反、郭治本反、李丑倫反 一一 徐況羽反 徐居彼反、向魚彼反
	「北」音逸、郭許鵬反、又已質反 「北」(筵) 徐音庭、李音挺 「北」郭欺竈反、徐音謙

卷四															
〔眞人行〕	〔命使〕	〔師傳〕	〔不材惡名〕	〔神不矜能〕	〔疏德養身〕	〔有用致患〕	〔務全〕	〔德平〕	〔無情〕						
頽 假	使	襍	螳螂	梨	腐	袖	夫	挫	繡	郤	桎	駭	傳	少	屨
渠追切、徐去軌切	音史	七亂切	魚列切、或作螳	音堂郎	奚結切	奉斧切	余救切	音扶	寸臥切	音懈	乞約切	之石切	胡楷切	大專切	許照切
更夏切													俱遇切	七句切	牛刀切
宣轉息戀一切													宣轉反、舊思緩反	五羔反、徐五報反	更白反
渠追切、徐去軌切	士亂反	一一	(孽) 彥列反	一一	向徐戶結反、徐又虎結反	扶甫反	由救反、徐以救反	音符	徐子臥反、郭租禾反	佳賣反	去逆反	之實反、郭眞一反	胡楷反	太專反	一一
李音仇、一音達													胡楷反	一一	一一
徐去軌反、郭苦對反、李音仇、一音達	〔北〕七亂反												〔北〕胡楷切、之實反、郭員一反	〔北〕胡楷切	〔北〕太專反

卷五	
「養正性命」	「推極委命」 「不言之教」 「無爲之治」 「坐忘」 「遊道域」 「相忘友」 「死生友」 「才道相膏」 「不遯化」
鶴 跬	行 佗 觚 崔 卓 遯 櫻 尻 句 翅 捍 疾 倪 術 藩 與 復 離 淋 醫 弋 跬
戶各切	下孟切 徒河切 攻乎切 取猥切 竹角切 杜本切 音嬰 苦羔切 俱遇切 詩智切 胡旦切 胡亂切 音涯 或音遂 父煩切 音豫 扶父切 力智切 音霖 五結切 逸織切 犬葉切
(缺) 戶各反 徐丘碑反、郭音曆 向丘氏反、李却垂反	下猛反 (他) 徒何反 音孤 千罪反、徐息罪反、郭且雷反 中學反 一一 郭音榮、徐於營反、李於盈反 若羔反 俱樹反、徐古侯反 徐詩知反 (悍) 胡旦反、又音旱 胡[缺]反 音崖、徐音詣 一一 甫煩反、李音煩 音象 扶又反 一一 (霖) 音林 王結反 一一
「北」 鶴 戶各反	「北」 五結反 「北」 音豫 「北」 音崖、徐音詣 「北」 胡亂切 音旱 「北」 胡旦反、又 「北」 苦羔反

[illegible]

	卷七	卷八
「神武」 「貴眞」 「遵法度」 「養志」 「廉清」 「率性」		「處无爲之事」 「聖人虚心」 「清靜民正」 「无爲民化」 「道无不爲」
冒 見 敦 鐸 拏 咳 伉 語 見 肘 難	鋪 瞋 乳 過 驢 隙 軾	詰 脛 施 否 藏 離 薄
莫報切 賢徧切 都昆切 五各切 音如 苦代切 苦浪切 魚據切 賢徧切 竹九切 乃但切 蒲故切 赤真亦夷一切 儒遇切 古臥切 音翼 去逆切 音式		公吉切 形定切 以鼓切 音鄙 才浪切 力離切 伯各切
苦報反 賢徧反 一一、一音丁回反 丑各反 女居反 若代反 一一 一一 賢徧反 竹久反 乃旦反 布吳反、徐甫吳反 赤真反、徐赤夷反 如樹反 一一 一一 一一 李去吉反、徐起列反、郭音矯、李音驕 刑定反 以智反 一一 一一 力智反 一一		
「北」莫報反 「北」五各反 「北」苦代切	「北」妒樹反	

卷九	
「專炆」 「矜重」 「善牧」 「釋疑」 「不爭」 「習成性」 「擇材」	「遺情累」 「化空」 「兩謬」 「名實」 「化機」
滑 齊 錢 汨 景 橋 轅 穀 父 簪 技 折	瞽 輓 頤 還 壇 眩 楮 樂 見 鑒 噉
音骨 側皆切 據巨二音 古忽切 於領切 居橋切 于元切 古緣切 音甫 以歲切 朱戌切、 舊作注 之舌切	古弔切 姑衛切 賢徧切 音洛 音貯 音縣 大丹切 音環 音怡 音況 莫逗切
(注) 之樹反 似歲反、徐以醉反、郭子稔反、 李尋恚反、信醉反、或蘇忽反 一一 一一 一一 居喬反、反巨消反 於類反 胡忽反 音據 一一 (骨) 一一、本亦作滑	古弔反 紀衛反 賢徧反 一一 豬許反 玄通反、司馬本作玄、音眩 太丹反 音患、又施面反 以之反 音輓、徐李休徃反 莫豆反
「北」於領切	「北」楮許反 「北」大丹反 「北」音況、徐李休徃反

	見	賢偏切	賢遍反	
「過巧」	見	賢偏切	賢遍反	
「忘伎」	彷彿	音傍皇	元嘉本作房皇、音同	
「因循成化」	伺	吐東切	吐功敕動二反	
「德隱」	見	賢偏切	賢遍反	
「大達」	泄	息例切	息列反	
	襲	音習	一一	
「真寤」	數	音朔	雙角反、又所主反	
「密移」	少	詩照切	一一	
	見	賢偏切	賢遍反	
「踐言」	離	人智切	一一	
	喪	息浪切	一一	
「內得外豐」	玦	音決	古穴反	
「藝精忘形」	「鈺」	音坦	一一	「北」吐袒反、徐音但
「詢衆任賢」	儻	音坦	吐但反、徐音但	
「神解」	通	塗困切	徐困反	
「可道」	媒	音昧	音昧	
「中極」	恂	須倫切	音荀	
	遺	夷佳切、舊作置	(置) 求位反	
「无有一際」	宛	隱紀切	於界反、郭於感反	
「得道秋豪」	僻	於院切	李音意、一音他感反	
	彷彿	音旁	於阮反	「北」彷彿音旁
	慢	正亦切	(缺) 音旁	
		武半切	匹亦反	
			武平反、徐无見反	「北」武平反、徐

卷十二	卷十一
「遷善」 「拙偽」 「禮偽」 「移是」 「自定」	「去智」 「不先物」
少 惡 辟 嫗 驚 鴛 處 𦵏 嗶 𦵏 朱 唯 𦵏 𦵏 𦵏 𦵏 𦵏 𦵏 𦵏 見 訖	見 訖
詩照切 爲路切 必碩切 烏遇切 魚到切 音學 召據切 一曰止也、達眷切 音勸 戶羔切 音獲 鍾輸切 惟癸切 音廚、昌于切 刀的切 女展切 於點切 側瑟切 苦計切 賢偏切	徒旦切 賢偏切
一一 烏路反 必碩反、又婢亦反 於禹反 五報反 （學）一一、本或作鸞、音同 昌據反 徐音勸 （缺）戶羔反 （獲）向音霍、亦作𦵏、音獲 又乙𦵏反、又烏邈反、又音羈 一一 唯癸反 昌于反、向音隣 一一 一一 烏點反、向音乙 亦作𦵏、郭音節、徐側冀反 （扶）莊筆反、又作攢 若計反 賢遍反	徒昌反、徐徒見反、郭音但 徒見反、郭音但 無見反 「北」徒旦反、徐 徒見反、郭音但
	「北」苦計反
	「北」嗶 戶羔反

卷十三											
〔止闕〕		〔抑道〕		〔儉安〕		〔相形〕		〔鬻名〕		〔戒驕〕	
見 約		瑩 見 湏 樂		姝 償 蛇 委 牂 瞿 難 見 殛 敖 捷 見 躋 調 脫 譙 踉 藿		〔修誠〕		〔謬妄〕		〔相名〕	
賢偏切 乙却切		音滢 賢偏切 沉璧切、李音溢		音樞 展羊時亮二切 餘支切 於危切 音藏		紀俱切 乃旦切 賢偏切 紀力切 音傲		疾業切 賢偏切 音擲		徒弔切 音良 在道切 音奪、他括切	
賢遍反 徐於妙反		音溢、郭許的反、李虛域反 賢遍反 音瑩、今本多作瑩、乙耕反		昌朱反 時亮反、又音賞 一一 一一 子郎反 紀具反 乃旦反 賢遍反 一一 一一 一一		徒弔反 （良）一一、或作踉、音同 在道反 音奪 徒弔反 呈亦反 賢遍反					
〔北〕音瑩、今本多作瑩、乙耕反				〔北〕乃旦反				〔北〕在道切			

<p>卷十四</p> <p>〔中道〕</p> <p>〔獨化〕</p> <p>〔去驕〕</p> <p>〔出異〕</p> <p>〔濫進〕</p>		<p>〔遠佞〕</p> <p>〔涉塵〕</p> <p>〔素定〕</p> <p>〔趣遠〕</p> <p>〔智困〕</p> <p>〔內通〕</p> <p>〔遠眞〕</p>
<p>從 己 屨 漱 稍 禪 倪</p>	<p>陪 他</p>	<p>演 鑿 胞 鵠 輕 制 濫 湛 菑 萑 漁 稷</p>
<p>音塵</p> <p>音擅</p> <p>山巧所教一切</p> <p>所救切</p> <p>俱遇切</p> <p>音紀</p> <p>才用切</p>	<p>音赴</p> <p>徒河切</p>	<p>音總</p> <p>音孫</p> <p>音丸</p> <p>音災</p> <p>丁南切、又音沈</p> <p>盧瞰切</p> <p>或作檻、胡暫切</p> <p>諸設切、本亦作浙</p> <p>才全切</p> <p>音胡</p> <p>並交切</p> <p>在報切</p> <p>似淺切</p>
<p>音崔、徐音詣</p> <p>所又反</p> <p>一一</p> <p>一一</p> <p>一一</p> <p>一一</p>	<p>徐芳附反、普豆反、郭薄杯反</p> <p>徒何反</p>	<p>音摠、一本作稷、初力反</p> <p>音孤</p> <p>音丸</p> <p>音戔</p> <p>丁南反、李常淫反</p> <p>徐胡暫反、或力暫反</p> <p>諸般反、應作浙</p> <p>七全反、又視專反、又音權</p> <p>一一</p> <p>普交反</p> <p>存報反</p> <p>似善反</p>
<p>〔北〕音崖、徐音詣</p>	<p>〔北〕徐芳附反、普豆反、郭薄杯反</p>	<p>〔北〕音丸</p> <p>〔北〕諸設反、應作浙</p> <p>〔北〕在報反</p> <p>〔北〕以善反</p>

	<p>〔蔡行〕 〔必達〕 〔儒道〕 〔墨教〕 〔論法〕 〔敘莊〕 〔評惠〕</p>		<p>痔 順 縵 傀 粗 脛 〔膾〕 謏 髀 舍 衍 譴 瑋 狉 詭 圉 祗</p>	<p>治紀切 殊閏切 或半切 郭呼乖切 七奴切 形定切 時亮切 戶禮切 戶瓦切 音捨 以戰切 遣戰切 于鬼切 音藩 九委切 除丸切 典禮切</p>	<p>治絶反 —— 武半反、又武諫反 郭徐呼懷反、字林公回反 —— 刑定反 —— 胡啓反、又音奚、又苦迷反 戶寡反、郭欺禍反 —— —— 遣戰反 —— 芳袁反、又音穰、又敷晚反 —— 徒丸反 丁計反</p>	<p>〔北〕治紀反 〔北〕勛禍反 〔北〕遣戰反 〔北〕芳袁反、又音穰、又敷晚反</p>
--	---	--	--	---	---	---

註

(1) 『正統道藏』の改編影印である陸國強編輯『道藏』(文物出版社一九八八第十五冊八九四—九五二頁)所收のテキストを用いる。

(2) 楊二〇五による。

(3) これに關しては別稿「陳景元の音注——『上清大洞眞經玉訣音義』と『南華眞經章句音義』について——」(假題)を豫定している。

(4) 陳景元は『莊子音義』以外にも複数の先行の韻書等を參考にしたと考えられるが、それについても右記(3)の別稿で觸れたと思う。

(5) 『道德眞經集注雜說』(注(1))『道藏』第十三冊所收)卷上。

(6) 注(1)『道藏』第十五冊所收。

(7) 黃一九九九年第一章第一節二十二、二十三頁參照。

(8) 虞二〇〇五參照。

參考文獻

* 論文

窪德忠「道藏について(一)——成立の過程——」(『東方宗教』第六號一九五四年)

吉岡義豐「道藏の成立について」(『宗教研究』一四七號一九五六年)

長澤規矩也「宋刊本南華眞經注疏と付刻本」(『岩井博士古稀記念典籍論集』昭和三十八年六月 いま『長澤規矩也著作集』第三卷 汲古書院昭和五十八年(一九八三)所收)

汪業全「『上清大洞眞經玉訣音義』音注考」(『桂林師範高等專科學校學報』第十八卷第一期(總第五十七期)二〇〇四年三月)

汪業全「史崇玄『一切道經音義』考」(『廣西師範大學學報(哲學社會科學版)』第四十卷第二期二〇〇四年四月)

馮娟・楊超「陳景元道藏音注研究——有關聲母系統的研究」(『西華師範大學學報(哲學社會科學版)』二〇〇五年第二期)

楊思范「『莊子』號『南華眞經』源流考」(『中國道教』二〇〇五年第二期)

虞萬里「天理本『莊子音義』與碧虛子所錄景德本比較研究」(『音史新論——慶祝邵榮芬先生八十壽辰學術論文集』學苑出版社二〇〇五年)

*單行本

坂井健一『中國語學研究』汲古書院一九九五年

黃華珍校（海外珍藏善本叢書）『日藏宋本莊子音義』上海古籍出版社一九九六年

黃華珍『莊子音義の研究』汲古書院一九九九年

陳國符『陳國符道藏研究論文集』上海古籍出版社二〇〇四年

（大谷大學助教授）